NPO法人
日本ららばい協会
Incorporated nonprofit organization Japan Lullaby Association

ららばい通信

Lullaby News

2022年
新春号

令和四年
あけまして おめでとうございます

画／大野隆司

2022年、群馬県下仁田町に女性村設立!

［目　次］

■ 特集
2022年 下仁田町で女性村プロジェクト始動！　西館 好子　…2
女性村設立に寄せて　…4
■ CONTRIBUTION／清風そよぐケンブリッジ　帯津 良一　…6
■ 絵解き 風流子ども歳時記
新春絵暦・うたごよみの巻　尾原 昭夫　…8
■ 新連載 日本子守唄紀行 第1回
「天満の市」（大阪市）　鵜野 祐介　…12
■ 連載 直島便り 第16回
「いただきます、ごちそうさまは、だれに言うの？」　山根 光恵　…14
■ POEM／命を知った日　星野　駿　…15
■ illustration　永瀬 嘉平　…15
■ 子ども配食の現場から ③　樋田 敦子　…16
■ 活動報告　…17
■ 寄付者名簿

2022年1月発行

表紙・本文デザイン／和田光司

令和4年 ららばい通信 新春号をお手元にお届けさせていただきます。

あけましておめでとうございます

コロナが一段落してやっと落ち着いて暮らせるかと思った矢先「オミクロン」の脅威。いつ果てるとも知れない感染症は、やはりこれから人間社会の強敵、恐怖と不安の元凶になりそうです。

しかし、もっと怖いのは、人の心のありようの変化です。どんなに文明が進もうが、環境が変わろうが、喜怒哀楽を持つ「心」がゆがんでしまったら、人は見えないもの、分からないもの、自然現象などに畏敬や敬意を払うべきなのに。「心のありよう」が変わって、心が軽視され始めたらどうなるのでしょうか。それが進めば、人類は人間ではなくなってしまうのではないでしょうか。

人を殺めたり、誹謗中傷したり、無視したり、玩具や機械の様に人間を見て、扱い始めたらこの世は終わりです。昨今、巷に起きている中学生の事件や社会現象を見るにつけても、そんな方向にいっているように感じて危惧しています。

電車に乗ればほとんどの人がスマホを使っている異常な風景を目にします。それが原因なのでしょうか。かっとなったり、我慢が足らないのか、偶発的な殺傷事件も後を絶ちません。

子供たちの声がうるさい、隣人の生活音が気にかかる、ちょっとしたことで開き直る、そんな人も多くなりました。

やさしさが見えない時代は、心が育たない時代。コロナの蔓延よりも怖い人間社会です。

人と人との間に思いやりとやさしさの橋を心に架ける人間社会にはならないのでしょうか。

そんなことを大人たち一人一人が考え、言動を心得るような年にしたいと思います。

女性村設立にむけての想い

日本ららばい協会　理事長　西舘　好子

女性が輝き続けるには
女性が女性であること
女性であることに
誇りを持ち続けることである

日本ららばい協会では、2020年後半、群馬県下仁田町と協力しながら、シングルマザーたちの支援をしようとする計画を進めてきました。アメリカのコカ・コーラ財団へ助成申請し、このほど、農業＋自立を目指す「ねぎぼうず」プロジェクトの助成が認められました。

ジェンダー平等が話題になる中、あえて「女性」を名乗るのはどうなのか、という意見もありました。

しかし、本来女性という性を持ち、命を産み育てる原点にいる女性たちが、本当に社会や家庭という中で、その力を発揮して豊かに生きているかと言えば、まだまだ達成はされていません。棚上げされている問題は数々あります。

現在の日本は子育てに決してやさしいとは言えません。出産や教育にお金がかかりすぎぎて、結婚もままならず少子化は進むばかり。また子を育て働く女性たちへの支援も環境も整備されているとは言えません。具体的な見直しや解決策が欲しいところですが、まだまだです。

一方、高齢化を迎えての社会的準備もままならず、巨大な数に上る団塊の世代800万人が一斉に介護世代に入れば、いったいどんな不都合や混乱が起きるでしょう。

長寿や生活の知恵を持つ女性たちが協力し、創造性をフルに活用し、それを発揮できる時期が熟してきたのではないかと思います。

食と直結し、子供の教育と女性の自立の場所を作るのは未来への投資と考え、あえて「女性村」と謳ってみました。

今春の開村に向けて準備が進んでいます。皆様からもご助言やご希望などをいただけます事を心待ちしています。一度は行ってみようか、という居場所を作りたいと思っています。自然の中で子どもや女性たちが生き生きと暮らしている姿を見に来ていただけるように行動していきます。

いのちのバトン

作詞・作曲　新井　満

はじめまして私の赤ちゃん
どうぞどうぞよろしく…

おばあちゃんから母へ　そして私へ
手わたされてきた　いのちのバトン
こんどは私からあなたへ　手わたします

ほらほらほうら　涙をふいて笑ってね
あなたは希望の子どもなんだから

＊世界中に　ひびくような声で言わせて
生まれてくれてありがとう
生まれてくれてありがとう

はじめまして私のお母さん
どうぞどうぞよろしく…

長い旅をしてお母さんから私へ
手わたされてきた　いのちのバトン
こんどは私から娘へ　手わたします

ほらほらほうら　お母さんこそ泣かないで
お母さんは勇気の泉なんだから

＊世界中に　ひびくような声で言わせて
産んでくれてありがとう
産んでくれてありがとう

過去から現在へ
さあ現在からは未来へ
手わたされ手わたしてゆく
いのちのバトン

＊世界中に　ひびくような声で言わせて
生まれてくれてありがとう
産んでくれてありがとう

画／渡辺あきお

「新井満さんは令和三年12月3日午前8時46分 函館市内の病院で逝去。本当にお世話に成りました。心からご冥福をお祈りいたします。」

特集

2022年 下仁田町で女性村プロジェクト始動！

日本ららばい協会理事長　西舘 好子

もはや40年近い昔のことだ。

先夫の井上ひさしさんがオーストラリアのキャンベラ大学日本語学部の教授に任命されたのを機に、私達は家族全員で赴任することになった。

住まいはオーストラリアの首都キャンベラのノースボーンフラット、町の北側の、メインストリートの森に囲まれたアパートだった。ここは市民が始終バーベキューをしてにぎわっていた。キャンベラは町全体が人工的に作られていて、中央に位置するグリフィン湖から、行政機関、商業地帯、学校、住宅地と、放射線状に整然と町が建設されている。機能的で実に清潔な町だ。

何処に行くにも家族一緒だったのは最初の一週間だけ。娘たちは学校へ。大学の講義はたまにあるだけだったので井上さんは戯曲の執筆に没頭、日本にいた時と変わらず昼夜逆転の習慣に戻ってしまった。途方にくれたのは私で、家事以外は何をしていいやら。地図を頼りに最初はあちこち見学と思ったがこの土地はあまりに広すぎる。まして雨が降れば道は川になっていたりする。仕方ないのでキャンベラにいる日本人の皆さまと付き合う事にした。そのご縁で陶芸家のスエン・ヒロエさんと知遇を得た。

フラットからは一時間余りの森の中にあるスエンさんの仕事場兼お宅に通い詰めた。

京都から両親を伴って移住してきていた。

ある日「2時間ほどかかるけれど女性村に行きましょう」というお誘いを受けた。ウーマンリブ盛んだった日本よりも、オーストラリアではさらに一歩進んでいた。活動家だけではなく、一般市民の女性たちの活動は目覚ましく、虐待や強姦などの事件は毎日報道され抗議の声を上げていた。多民族国家の移住は文化も法も風習習慣も違うので、問題を解決するには時間がかかるのだが、行動には目を見張った。

「あなたの夫を疑いなさい」というプラカードを高々と掲げたデモには、異なった国の女性たちが、長い列を作って行進していた。

そんな状況を見ていたので、どんなものかよくわからないまま女性村に行ってみようと決めた。

クエンビアンという町に女性村があった。どのあたりであったか、とにかく長い道のりだった。いくつもの村や町を超え、車は山道に入り、長い坂道を登り、しばらく行くと道の両サイドに花や緑の植木鉢が並んでいた。

「今日は女性村のバザールの日なの、私もここで時々陶芸教室をしているの」

なるほど日本でいう屋台、ここでは数々の手作りのワゴンが、風船で飾り立てたり手製の看板を掲げたり、大きなピエロで身を包んだ売り子がいたりと、まさにバザールという名の通りのにぎやかさだ。私は手製ジャムやピクルス、燻製やハーブのお茶などを仕入れて、ベンチで音楽を聴いて帰ってきた。道端の植木はほとんどなくなっていた。あれは売り物だったのだと気づいた。

女性村の拠点になる廃校になった小学校

遠さもいとわず、毎週私は女性村に出向いて行った。フラットのポストには、その週のイベントやバザールの招待状が手書きで投函されてきた。バザールは女性たちの手製の品物、スカーフやテーブルセンターや陶器、絵などのほか、必ず、女性たちが作った野菜の束や花束、その日に食べられる料理などが売られていた。

「いちばん汚れていいという汚い恰好をして子どもたちよあつまれ」

「お家のおばあちゃん、おじいちゃんの昔のものを持って集まれ」

「赤ちゃんシャワーパーティ」

「スラックス会議への発言者募集」日本でいえばモンペ会議である。

いちばん汚いでたちの子どもたちは、マンモスのような土の山と大きなアドバルーンのような風船の滑り台で土まみれになった。そんな泥だらけの子どもたちを前に有名な政治家が自作の詩を披露した。

昔のバックや前掛を付けた少女たちの行った日は、背景に、昔の開拓地の町が段ボールで作られていた。パンジョーが、オルガンが、昔の音楽を奏でていた。

これらの企画が女性たちの手によって企画され、実行されると知った。

彼女たちはシングルマザーで、考え方の基本は「子どもたちの未来のために」ということ。生命と暮らしを教え、創造力の楽しさと、楽しく畑で土に触れさせ、働くことを体験させていた。種まきから収穫まで、そしてそれらの加工を伝授する老人たちがボランティアでやってきた。

当然のようにスエンさんのように陶芸を教え、森の中で小人づくりなどの物語を描く作業も子どもたちの夢の作業になっていた。

私はワクワクしながら毎週女性村に行き、この母性の豊かさが結集する村づくりが出来ないだろうか、考えていた。

「女性たちによる農業と子育ての村」。今思えば、あの強烈な思い出が、まさか実現に向けて動き出すとは予想すらしていなかった。

下仁田のの自然風景

オーストラリアがそうであったように、多様なものを考え、土との共存共栄を模索し、文化や自分育てをしながら、町に溶け込んで子育てしていければ、こんなにいい事は無い。

ご縁があって下仁田に降り立った時、都心に近いこの町に日本の女性村ができないだろうか、ふつふつと夢が膨らんできた。原秀男下仁田町長、町役場のみなさん、浅野健さんらのご尽力でここまできた。町民の方と一緒になって、女性が輝ける町を作っていきたいと思っている。2022年春、いよいよ開幕である。

下仁田「ねぎぼうず」プロジェクト

女性村開設へ始動

首都圏に近い群馬県下仁田町を拠点とし、自然の中で子どもは生きる力をつけ、母親もまた生き生きと子育てをしていけるように、自立した女性を目指す、シングルマザーの仕事と生活の支援をしていくプロジェクトです。

このプロジェクトに対し、米国The Coca-Cola Foundationは、35万ドル（約4000万円）を助成することを決定。女性たちは「半農半X（Xは別の仕事を半分持つという意味）」という働き方で自立をしていく3か年計画のプロジェクトです。コカ・コーラは、世界200か国で環境、多様性の尊重、コミュニティー等を対象とするサスティナビリティー活動を展開しており、日本でもNPOと協働して、2020年までに7500人以上の女性の活動を支援してきています。「ねぎぼうず」プロジェクトへの支援も、シングルマザーの就労支援の取り組みの一つです。

近年、日本の食料自給率は下がり、37%。野菜の自給率は80%ですが、そのタネは90%輸入に頼っています。15年後には自給率は15%まで下がると言われており、まさに日本国民の、国家存亡の危機にあるとも言えます。そこで協会では農業に注目しました。

下仁田町の廃校になった西牧小学校を1棟レンタルし、そこに拠点を築き、その周りで女性たちは農作業をし、半分は別の仕事に就くというものです。

自然豊かな町の中で、町民とつながりながら地元の知恵を生かして、ウインウインの関係が築けるような取り組みをしていきます。

THE Coca-Cola FOUNDATION
P. O. BOX 1734, ATLANTA, GA 30301

November 29, 2021

Mrs. Atsuko Hida
Mother and Child Support Room Director
Lullaby Japan Association
Miura Bldg. 1 F 3-13-13
Takasago Katsushika-ku,
Tokyo, Japan 1250054

Dear Mrs. Hida:

On behalf of The Coca-Cola Foundation, it is my pleasure to confirm a grant award of $350,000 to Lullaby Japan Association. This women's empowerment grant establishes a village for 50 women in the Shimonita-machi, Gunma Prefecture region outside of Tokyo, Japan. The women will be taught agricultural skills to empower them to sell at markets or as street vendors. We look forward to hearing more about the impact of your program.

A one-time payment was sent to your organization's bank account on November 16, 2021. In order to meet our compliance and tax requirements, you will be asked, via email, to acknowledge receipt of this grant payment and to complete other required progress reports in our system (see attached Grant Terms & Conditions).

If you have any questions regarding this grant award or its requirements, please contact Hiromi Koizumi, Senior Manager, Sustainability and Community on External Affairs, at hkoizumi@coca-cola.com.

Best wishes for your continued success.

コカ・コーラ財団から届いた承認のレター

女性村設立に寄せて

日本古来の伝統も引き継いで

日本ららばい協会理事　剱持　英子

ここ数年だけみても、ひとりで生きていく女性のかたが多くなっています。そういった人たちが集まって女性村をつくるということは、とても素晴らしいと思いました。ひとりで生きていく、ましてや子どもを抱えて生きていくのは、想像しただけでも大変です。誰にも相談できないような不安や悩みを抱えていることでしょう。この女性村の設立で、同じような悩みを抱える人たちが仲間となって、事業を一緒にやることで、考え方も変わっていき、少しでも生きやすくなれば良い、と私は考えています。

本格的ではないとはいえ、初めて農業をやりながら、仕事を持ちながら、生活していくのは覚悟のいる事です。でも、私はいろいろな可能性を女性たちに試してもらいたい。中でも「日本の伝統技術」を守っていくという気持ちを持ち続けてほしいと思いました。

女性村が建設される下仁田町に隣接する富岡市は、世界遺産にもなった富岡製糸場がある場所として知られています。下仁田町も以前は、桑を育て、蚕を飼育する町でした。その養蚕業は跡継ぎもいなくなり、廃れていったそうです。

私は、きもの文化研究家の中谷比佐子さんに出会い、蚕からできる絹織物に魅せられました。日本の蚕は世界一。茨城県阿見町にある一般社団法人大日本蚕糸会蚕糸科学技術研究所で飼育した繭から織られた丈夫で良質の牛首紬でした。これは美智子上皇后さまが宮中で育てられた「小石丸」と呼ばれる品種で作られていました。美智子上皇后は、「日本古来の蚕が姿を消す」のを恐れて、雅子皇后に引き継がれ、今でも飼育されているという事です。

また東京オリンピック2020の金メダルのリボンは純国産絹による組み紐が使われました。

そんな伝統文化を私たちの世代でなくなってしまうのは残念でなりません。次世代に向けてぜひ引き継いでほしいと思います。蚕だけではなく、草絵、草木染、紙すきや機織りといった、古来からある伝統文化を引き継ぐ人たちが、ここの女性村から育っていったら最高ですよね。

コロナになって、人々の考え方も変わりました。どんな生き方をしていくのか、それを突き付けられた気がします。いまや「ありがとう」から始まる、優しい感謝の言葉がけが必要な時代です。

女性村のサロンに、女性たちが集まり、それを支援する町の人が集まって、一緒にコーヒーでも飲んで、そこから生き甲斐が生まれて、すべての人が共生できるような村になるといいですね。

できれば私のような高齢のひとり暮らしの女性も仲間に入れてほしいです。今後は、そのための力添えを惜しまないつもりです。

あたたかいつながり

日本ららばい協会理事　藤澤　昇

井上勝江先生の版画が、児童養護施設の子どもたちの生活の居場所に静かに佇んでいる。

私は令和2年11月3日の児童養護施設「みちのく・みどり学園」の移転新築落成式の式辞の最後に次の言葉で締めくくった。

「本日落成式の折、日本板画院名誉会員井上勝江様から『子どもたちの為に』と新作の版画を制作して頂きご寄贈頂きました。私たちは、この版画を日々目にしながら、この施設で、雨の日も、風の日も、例え嵐の日でも、何としても子どもたちを守り抜き、皆様方と手を携えながら子どもたちの未来を作っていきたいと思います。それが社会的養育に携わる私たちの責務と、今心得を新たに決意し式辞といたします」

版画ご寄贈の経過は、学園の移転新築に際して、西舘好子氏（みちのく・みどり学園移転新築後援会会長）のご縁で実現した。

井上先生は、その日子どもたちに目をやり「今子どもたちは感激しなくても、なにも思わなくても構わない。心のどこかでそれに触れて、成長し社会人になり恋人と街を歩いているときにでも、あれ『版画だよ』とそんなふうに言える子どもに成長してくれたらいい。多分心の中のどこかに残るだろうと思って、作品をいつも作っている」と思いを込め語った。

あれから1年。コロナ渦で対外活動自粛のなか、第51回牧草会弁論大会（注：中学生の自治組織）が開催された。この半世紀越えの弁論大会は私たちが心血を注いできた宝のようなイベントだ。生徒がそれぞれの思いを、みんなの前で披露する。

会場で子どもたちが論じる目の先には、風船の中で四季折々の花が舞う、井上先生渾身の板画「花の詩」が展示されている。

その前でAさんは、静かに話し出した。彼女は3歳で虐待された母から離され、今15歳の中学生。いわゆる社会的養育で育ってきた。

「里親さん、ホームの仲間、そのホームに来て勉強を教えてくれる小学校の元先生。地域の方々の『行ってらっしゃい』の見送りの声掛け。尊敬する兄。あたたかいつながりで、私は幸せです」

彼女は、自らの社会的養育の体験を振り返り、このスピーチで見事優勝を勝ち取った。

*

井上さんが描いた風船の画が、下仁田のねぎぼうずにも飾られるそうである。この画の前で、今後いろいろな話題が語られていく。その光景が目に浮かんだ。私が50年以上にもわたって携わってきた「社会的養育」の問題をみなさんと真剣に考え、討議できる日が来ることをねがっている。

みんな自由に

版画家　井上勝江

だれでも子ども時代はみんないい子です。さまざまな事情があって、大人や、時代や、環境を恨むようになります。人の歴史は、ひとりで勝手に作れるものではありませんから、それは悲しい思いや苦労をして、曲がってしまうのだと思います。

私は少年院で子どもたちに版画を教えました。というより正直特別な子どもたちとずいぶん長いこと染色や版画で一緒になって楽しんだ経験があります。そこで私が見たものは、神経を研ぎ澄ませて一心に版画にむかう子どもたちの、ごく普通の子どもの、いやそれ以上かもしれない「美しい目の輝き」でした。私の師匠は、幼い頃目を悪くした版画家の棟方志功さんです。彼は小さい頃、田んぼで思わず転んだ時に、目の前に現れた小さな小さな「オモダカ」という白い小花の、あまりのかわいらしさに感動し、一生涯書き続けるようになりました。綺麗なもの、心を育てるものに向かえば、新しい道が開けます。

下仁田に女性村を作りたいという話を西舘さんに聞いたとき、自然の中で子どもたちはどんなに自由に飛び回れるだろうかと、嬉しくなりました。

シングルマザーのお母さんたちも、子どもが健やかに育ってくれることがいちばん気がかりなのです。ひとりで子どもを育てるというプレッシャーと重責を負うお母さんたちの応援をしたいという思いは、私も大いに賛同、応援していきたいと思ったものです。

その話を版画の仲間たち、そしてピアニストのフジコ・ヘミングさん、デザイナーのコシノ・ヒロコさん、歌手のジュディオングさんなど、みんなが応援に回ってくれると言いました。

下仁田は東京に近いし、軽井沢も隣です。夏などは皆で行って滞在して、絵や版画を教えたいし、楽しいことをしたいとみんなで話しています。

子どもは未来の宝です。日本だけではなく、世界の未来は、子どもたちにかかっています。

子どもたちの心の成長にかかっています。

お金やモノではなく、大人たちが心血注いで、子どもと接し、共に時間を共有する。ねぎの畑や花も育てる、絵や陶芸や料理も・・・・とみんなが楽しみ、一緒に素晴らしい時間を過ごせるなんて、なんて素晴らしいことでしょう。シングルマザーのお母さんたちに、あなたは一人じゃないのよ、と勇気づけてあげたい。そういう私もシングルマザーでしたから、大変さは良くわかります。今は仲間がいて、仕事があって、どんな子も愛しいという考えで「老い」を楽しんでいます。

廃校になった学校が拠点になると聞きました。たくさんの版画や絵を飾らせてねと西舘さんに頼んでいます。仲間たちの絵が、私の教室の皆さんの作品が並ぶようしたいです。

私の作品が、この活動のために何かお役に立つならば、これほどうれしいことはありません。

心が悲しみや淋しさにあるとき、一人ぼっちで喪失感にあるとき、音楽や絵といった芸術作品が生きる喜びを運んできてくれるということは、長い経験から学びました。

下仁田の女性村が、女性たちのやさしさで満ち溢れることを信じています。

井上勝江　「万葉植物 眞方」

CONTRIBUTION

【寄稿】清風そよぐケンブリッジ

帯津 良一

西舘好子さんの近著『かもじや』のよしこちゃん」（藤原書店）を読んで幼き日への郷愁にかられたものです。好子さんと私は四歳違いですから同じ世代といってよいでしょう。太平洋戦争の終戦が小学校四年生。類ない激動の時代も幼い少年の心にはけっして苛酷なものではありませんでした。

物資の窮乏も極めていました。米飯などにはめったに在り付けませんでした。わが家の晩餐風景。父親を上座に母親、私、弟、小母さんが丸い卓袱台を囲む。各人の前には一皿ずつのマッシュポテトだけです。副食めいた食物は一切ありません。それでも全員和気藹藹と話し合っています。このマッシュポテトはおばさんが作ったものですが、じつに旨いのです。父親も目を細めて手酌で盃を傾けています。

ところで私の実家は川越市の目抜き通りで玩具店を営んでいました。住まいは少し離れた処にあったのですが、両親はお店で手いっぱいなので、私たち兄弟の世話を含めて家事一切は小母さんが担当していました。小母さんは血の繋がりはないのですが、なかなかハイカラな人で、成長期の私の人間形成に資すること多大なものがありました。

戦局は日を追って不利になっていき、小学校三年生になったときに空襲が始まり、それと前後して東京からの学童疎開の波が押し寄せてきました。それでも子供ですね。危機感を募らせるどころか、東京の子は上品で綺麗な女の子が多いなと胸をときめかせていたものです。

それでも人々は大本営発表と信じて勝利を疑いません。言論の統制も厳しく、うっかり日本が負けるなんて言おうものなら、すぐさま憲兵隊にしょっ引かれかねません。ところがうちの小母さんは違いました。ある時私と弟を前にして、

「良ちゃん！この戦争は負けますよ」

と宣うではないか。驚いたのはこちらの方で、誰かに聞かれなかったかと周りを見回したものです。この小母さんはたしかに普通の人たちとは違っていました。それを子ども心にわかって、一目置いていたことも確かです。

そして、1945年8月15日の終戦。私は小学校四年生。誰もかれもが先行きの不安とともに途方に暮れているというのに、小母さんときたら、もう私を捕まえて、

「良ちゃん！あなた、大学はケンブリッジに行きなさい！」

との御託宣。もちろんこちらはケンブリッジのなんたるかを知りません。それでもまさに、

清風故人来る（杜牧）

の衝撃はいまでも鮮やかに蘇ってきます。

まだ興奮醒めやらぬうちに、作文の授業で与えられたテーマが「夢」。得たりやおうとばかりに「あこがれのケンブリッジ」について書いてしまったのです。昨夜見た夢について書いているクラスメートが多いのに、いきなりケンブリッジが飛びだしてきたので、戦争が終わって復員したばかりの担任の先生もいささか驚いたらしく、模範作文として紹介され衆目を集める羽目になってしまい、しばらくは「ケンブリッジ」が私の綽名になってしまったのには閉口したものです。

しかし、後年大学受験の際は、とてもケンブリッジというわけにはいかず、ごく自然に東京大学を受けてしまいました。ケンブリッジ行きが実現するのははるか後年、2001年9月のことでした。ケンブリッジのクライスト大学で、代替療法に関するワークショップが開かれたのです。主催は日本の大和薬品。私は幼い頃の小母さんとの約束を果たすためにもこの機会を見逃すわけにはいかなかった上に、当時すでに人間まるごとを対象にするホリスティック医学の世界に分け入っていた私にとっては、代替療法は大きなテーマだったのです。

代替療法とは通常医学としての西洋医学以外の治療法のことです。西洋医学はからだを対象とした医学として、20世紀大きな発展を遂げましたが、まだ、いのちの世界には斬りこんでいません。一方、代替療法の多くは勇躍、いのちの世界に斬り込んでいます。いのちを対象にするのが本来の医学であるとすれば、代替療法は西洋医学の前を行く、より上位の医学なのです。しかし、いのちについてまだ科学が解明していない現在、科学的根拠が乏しいという難点があります。

一方、ホリスティック医学は、からだ、こころ、いのちの三つが一体となった人間まるごとを対象にする医学ですが、まだ一つの方法論というものを手にしてはおりません。そこで

からだに働きかける西洋医学。
こころに働きかける各種心理療法。
いのちに働きかける代替療法と養生法。

のそれぞれからピックアップした治療法を統合して個性的戦略に組み立てて用いているのが現状です。

というわけで、私としては代替療法をテーマにしたワークショップも、これまた見逃すわけにはいかなかったのです。初日の冒頭でのクライスト大学の学長さんの挨拶。

「皆さん、この大学の静かでやさしい雰囲気を感じていただけたでしょうか。代替療法は心身にやさしい医学です。だからこの大学で代替療法のワークショップがひらかれるということは、実にふさわしいという事なのです……」

いやあ感激いたしました。さすがは大英帝国。日本の大学ではなかなかこうはいきません。

ワークショップの内容も抜群でした。十分に満足して帰国致しました。その足で、小母さんの霊が奉られている函館の東本願寺別院の船見支院の廟を訪れ、逐一報告してまいりました。小母さんとの約束を果たすことができて、ほっと胸を撫で下ろしたものです。

それからというもの、いのちが私の最大関心事となりました。いのちとは何か。現在のところ、次のように考えています。

いのちとは内なる生命場のエネルギーである。

と。私たちのからだの中にも電磁場もあれば重力場もあります。さらにはまだ発見されないとはいえ、生命に直結する物理量が分布して生命場なるものをつくっていることは十分に想像できます。

その生命場のエネルギーがいのち。そして、その生命場のエネルギーが何らかの理由で低下したとき、それを回復すべく、生命場に本来的に備わっている能力が自然治癒力なのです。

そしていのちと自然治癒力とを合わせたものが生命力で、生命力を正しく養うことが養生という事になります。辞書には養生とは生命を正しく養うこととありますが、生命と合わせて自然治癒力をも養ってこその養生なのです。

さらに死についてもはっきりとさせておきましょう。死はいのちの終わりではなく、いのちのプロセスの一つなのです。ということはプロセスの向こうにもう一つの世界が存在しているのです。

私たちのふる里であり、きっと魅力あふれる世界ですよ。大いに期待して歩を進めようではありませんか。これが生と死の統合です。

これが現在のところのいのちと死に対する私の考えなのですが、これをこのままお子さんたちに説明してもわかりにくいでしょう。まずは大人が理解してから子どもさんたちにやさしく説いてください。そして何よりも小母さんのケンブリッジの清風が背中を押してくれていることを忘れないでください。

告知　次号から帯津先生の連載が始まります。

帯津良一　プロフィール

1936年、埼玉県川越市に生まれる。東京大学医学部卒業、医学博士。東大医学部第三外科に入局し、その後都立駒込病院外科医長を経て1982年、川越市に帯津三敬病院を設立。2004年には、池袋に統合医学の拠点、帯津三敬塾クリニックを開設。
日本ホリスティック医学協会名誉会長。著書に「代替療法はなぜ効くのか？」「健康問答」など。その数は100冊を超える。

絵解き

風流子ども歳時記

～新春絵暦・うたごよみの巻～

わらべうた研究家　尾原 昭夫

乾坤輝く　横山大観画
「日本名画800」より

佳き初夢を

お正月っつぁん　お正月っつぁん
どこまでお出でたな　富士のお山の裾まで
何を持ってお出でたな　みかんに　かちぐり
だいだい　ほんだわら

（滋賀わらべうた）

「一富士　二鷹　三なすび」が初夢の吉兆とされる。日本一の富士の山、その富士山麓の鷹は最高で、駿河の茄子（なす）も逸品だとして、徳川家ゆかりの駿河の国にちなむとする説。また「富士は不死に、鷹は高貴で出世に、茄子は子孫繁栄に通ずるという説、など諸説がある。

お宝　お宝　お宝ァ

（東京わらべうた）

東京の下町では、正月二日の夜に枕に敷いて寝ると佳い初夢を見るとして、七福神の宝船を描いた木版刷りの「お宝」を、その日の夕暮れに子どもたちが売りに走った、その売り声である。絵の余白には「なかきよの、とをのねふりのみなめさめ、なみのりふねの、をとのよきかな」（永き世の、遠の眠りの皆目覚め、波乗り船の、音の良きかな）という、上から読んでも下から読んでも同じ言葉になる回文の和歌が刷り込まれていた。永えの平穏と幸せを願う、まことにめでたい歌である。

宝船　なかきよの　『守貞漫稿』より

今年は寅年。虎にちなみ私の故郷、出雲の張子の虎の写真を掲げる。出雲ではおもに端午の節句に飾るおなじみの郷土玩具である。

虎のうたといえば、かつて大流行した尻取りうたの「牡丹に唐獅子」を挙げておきたい。言葉遊びとして、また子守唄にもうたわれた。

出雲の玩具　張子の虎
筆者蔵

福の神　恵比寿・大黒の人形
筆者蔵

牡丹に唐獅子　竹に虎
虎を踏まえた　和唐内
内藤様は　下がり藤
富士見西行　後ろ向き
むき身はまぐり　ばかはしら
柱は二階と　縁の下
下谷上野の　山かつら
桂文治は　咄家で
でんでん太鼓に　笙の笛
閻魔は盆と　お正月

（東京わらべうた）

福寿への祈り

千ぞや万ぞ　お船はギッチラコ
恵比寿か　大黒か　こちゃ福の神よ

（東京わらべうた）

お恵比須さんの　能には
一に　俵ふんまえて
二には　にっこり笑うて
三には　盃差し合うて
四つは　世の中いいように
五つは　出雲の若恵比須
六つは　無病息災に
七つは　何事ないように
八つは　屋敷を取り広げ
九つ　小蔵を建て広げ
十に　取って治まった

（新潟子もりうた）

千福山の　中の沢で
縞の財布を　見つけた　見つけた
おっとり上げて　中を見たれば
黄金の玉は　九つ　九つ
一つの玉をば　お上に上げて
朝日長者よと　呼んばれた　呼んばれた
呼ぶも呼んだし　呼ばれもしたし
朝日長者よと　呼んばれた　呼んばれた
長者殿は　京から下って
瀬田の反り橋　かけやる　かけやる
瀬田の反り橋　踏めば鳴るが
大工柄か　木柄か　木柄か
大工柄より　木柄よりも
手斧とかんなの　かけ柄　かけ柄

（岩手子もりうた）

玩具絵　百福年中行事
画者不詳

正月の遊び

餅つきに見入る子守たち
山本松谷画　『風俗画報』より

正月の遊び ＜ぶりぶり＞
西川祐信画　「大和童行事絵巻」より
（今のホッケーに似た打球遊戯）

寛文年間　京都の正月
ぶりぶり　羽根つき
『風俗画報』より

たこたこ上がれ
　天まで上がれ
字だこに絵だこ
　もっともっと上がれ
（東京わらべうた）

＜福笑い＞
おかめの顔付け
『吾妻余波』より

七草の鳥追い

七草なずな　菜っ切り包丁まな板
唐土（とうど）の鳥が　日本の国へ
渡らぬ先に　合わせてバッタバタ
（静岡正月うた）

かるた会
竹久夢二画

春の賑わい　歌川国芳画（部分）
筆者蔵

小正月のとんど・なまはげ

今年は、唐土の鳥ならぬ新型コロナウイルスも、バッタバタ、トントントーンとたたき出し、しっかり追っ払ってしまいたい。

正月七草の鳥追い
山本松谷画　『風俗画報』より

小正月の行事＜左義長＞（とんど）
『天和長久四季あそび』より

小正月の行事＜なまみはぎ＞
菅江真澄画　『男鹿の寒風』より

旧暦の正月十五日、または十四日から十六日までを＜小正月＞という。元日から七日までを「大正月」というのに対しての言い方で、二番正月などともいう。小正月には全国的にさまざまな行事が、むしろ大正月以上に盛大に行われてきたが、なかでも子どもたちに印象深いのは「左義長」や「とんど」などという＜火祭り＞や、秋田の有名な「なまはげ」などであろう。

雪は友だち　豊年のしるし

雪に暮るる　川瀬巴水画
「日本名画800」より

雪よ降れ降れ
正月ござる
（兵庫わらべうた）

上見れば虫コ
中見れば綿コ
下見れば雪コ
（秋田わらべうた）

新連載

日本子守唄紀行

第1回「天満の市」（大阪市）

鵜野 祐介（立命館大学教授）

前号まで「世界子守唄紀行」と題して、世界各地の子守唄を紹介してきましたが、今号から新シリーズ「日本子守唄紀行」をスタートさせることになりました。日本各地の子守唄の舞台を訪ねて、その唄が生まれた背景や、歌い継がれた風土について想いを巡らせてみたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

今回訪れたのは、大阪市北区の南天満公園にある「天満の子守歌」歌碑と子守娘像です。地下鉄御堂筋線および京阪電車の「淀屋橋」駅で下車し、一番出口から地上に出ると、御堂筋を挟んで東側（右手）に大阪市役所があり、その横の歩行者専用道「みおつくしプロムナード」を東に進むと、大阪府立中之島図書館、大阪市中央公会堂と明治時代に建てられた重要文化財が続き、さらに大阪市立東洋陶磁美術館、そして昨年七月に開設された安藤忠雄寄贈の図書館「こども本の森中之島」が立ち並ぶ素敵な散歩道です。プロムナードの突き当たりの難波橋を左方向（北向き）に渡り終えると、川沿いの歩道を東へ進んでいき、さらに天神橋の下をくぐり抜けたところに広がるテニスコートと桜並木の細長い公園が南天満公園で、その中ほどに赤ん坊を背負った着物姿の少女の銅像が川面に向かって立っています。

南天満公園にある子守唄娘像と歌碑
天満青物市場場跡の石柱

歌碑には「天満の子守歌」と書かれていますが、歌詞の冒頭が「ねんねころいち　天満の市よ」であるところからそう呼ばれることもあるというだけで、天満がこの唄の発祥の地であるとか、この界隈でのみ歌われていたという意味ではなく、この唄は大阪府全域、近畿一円と徳島県に深く浸透しており、遠くは長野県から広島県や愛媛県までに及ぶことを、この唄の歴史的背景を詳しく調べた故・右田伊佐雄氏が『子守と子守歌』（東方出版一九九一）の中で指摘しています。ここでは右田氏にならって「天満の市」と呼んでおきましょう。

歌碑と子守娘像から二〇メートルほど背後に、「天満青物市場跡」の石柱が建っており、ここにかつて、戦国時代を発祥として江戸時代中期に最大勢力を誇った天満青物卸市場があったことを教えています。そしてこれが、「天満の市」の歌碑と子守娘像がこの場所に建立された理由に他なりません。歌碑に記された歌詞は次の通りです。

ねんねころいち　天満の市よ　大根揃えて　舟に積む
舟に積んだら　どこまで行きやる　木津や難波の　橋の下
橋の下にハ　かもめがいやる　かもめ取りたや　竹ほしや

右田氏によれば、歌詞もフシ（旋律）も、土地土地によって少しずつ変化しており、特にフシについては同じ町村内でも人によって異なり「百人百フシ」だったといいますが、ここでは右田氏と親しい間柄だった尾原昭夫氏が編集した『日本子守唄選集』（郷土文化協会二〇〇九）中巻に収載の二種類の「天満の市」をご紹介します。［一］はゆったりとした四分の二拍子で、「ミ-ソ-ラ-ド-レ」の五音からなる民謡音階の旋律が優しく温かい印象を与えます。一方、［二］の方は「レ-ミ-ファ-ラ-シ」の五音からなる都節音階を基調としており、みやびやかで洗練された曲調です。歌い比べてみて下さい。

天満橋・天神橋間の北岸に天満市場があった
（一八四五年の大阪地図）

難波村・木津村付近図
（一八四五年の大阪地図）

次にこの唄の詞型は、伝承子守唄の代表的な二つの詞型のうちの一つ、七七七五近世調です。ちなみにもう一つの詞型は七五反復調で、「江戸の子守唄」と呼ばれている「ねんねんころりよ　おころりよ　ぼうやはよいこだ　ねんねしな」が該当します（大塚民俗学会編『日本民俗事典』（弘文堂一九七二）「子守唄」に拠る）。

歌詞を見ていくと、「ころいち」-「てんまのいち」-「ふねにつむ」-「はしのした」-「かもめ」-「とりたや」-「ほしや」と、韻を踏み、あるいは尻取り形式を取りながら、物語が展開していきます。そして、先に述べたようにこの子守唄には数多くの類歌があるのですが、それらの中には「天満」「木津」「難波」「道頓堀」「角座の芝居」といった地名や場所名が登場し、また「舟」「橋」「かもめ」などの言葉も「八百八橋がかかる水の都」大阪を彷彿とさせます。さらには、「網はゆらゆら由良之助」と、一七四八年に道頓堀の竹本座で初演された浄瑠璃『仮名手本忠臣蔵』の主人公・大星由良之助（大石内蔵助）の名前も見られ、まさに大阪ならではの子守唄と言えるでしょう。

「天満の市」［一］

「天満の市」［二］

この唄の成立背景をめぐって、右田氏は次のようなミステリー・タッチの謎解きをしています。今でこそ大阪ミナミの繁華街である難波は江戸時代、海水が浸みていたせいか稲作には適しておらず青物（野菜）畑が広がる農村地帯だったが、この難波や隣村の木津から農産物を舟に積んで、天満の市場へ運んでいくのが実際のコースであるにもかかわらず、唄では「天満から大根を舟に積んで木津や難波へ運んでいく」と逆コースになっている。また唐突に「由良之助」が登場する。それは何故か？

理由は次の通り。天満市場に対抗して自分たちで市場を開設したいと考えた木津や難波の百姓たちは、一八世紀初めからたびたび奉行所や代官所に嘆願したが、天満市場の商人たちは奉行所に多額の冥加金を納めていたためか何度も却下された。その理不尽さを何とか公衆に広めようと一計を案じた百姓たちは、当時「八幡蚊帳」と呼ばれる蚊帳を売り歩いていた近江（滋賀）の行商人が近畿一円で歌っていた物売り唄「竹馬よいち」に目を付け、自分たちの特産物である大根を登場させた替え唄を作った。この大根を理不尽とも言える逆コースに運搬させ、また理不尽な咎めを受けた主君の仇討を果たした当時大人気の「由良之助」を登場させたこの替え唄を、大阪の町の内外で子守奉公をする自分たちの娘に歌わせて公衆の注目を集め、利権絡みで結託する天満市場商人と奉行所の理不尽なふるまいを告発しようとした。その甲斐あってか一九世紀はじめの一八〇九年、難波村百姓市開設の認可が下りたのである――。

右田氏自身も認めるように、子守唄「天満の市」が木津・難波の百姓市開設嘆願のデモ・ソングであったという仮説の裏付けとなる物的証拠は何一つありませんし、今後も出現することはおそらくないでしょう。けれども江戸時代中期の大阪で起こった［商人-百姓-奉行所］の三つ巴の思惑が絡んだ社会的事件を背景として、この大阪ならではの子守唄が誕生したと想像するとワクワクしてきます。また、寝具の一種である蚊帳の売り口上だからこそ、「ねんねころいち竹馬よいち」と子守唄風なのだという説もなるほどと思わせます。この唄に限らず、どこか謎めいた歌詞を含む子守唄は数多くあり、次回以降もこうした「謎解き」もご紹介していくつもりです（西舘好子『子守唄の謎』祥伝社二〇〇四もご参照ください）。

最後にもう一言。これも右田氏の前掲書に書かれていたことですが、難波村の特産物として大根と並んでネギがあり、うどんにカシワ（鶏）肉とネギを添えた一品を「鴨なんば」と呼ぶのはこれに由来しているそうです。ちなみに、岡山出身の筆者は子どもの頃、正月料理として「なんば」という一品をよく食べていたのですが、それはすまし汁でお餅にカシワ肉ときんぴらごぼう、そして青菜（ほうれん草や水菜など）を添えたものでした。これがなぜ「なんば」と呼ばれるのか、この本を読んで合点がいった次第です。読者の皆様、今年の正月はぜひ「天満の市」を歌いつつ、「鴨なんば」や「なんば」をご賞味下さい。

↑
こちらから
日本ららばい協会の
Youtubeチャンネルで
「天満の市」を
ご視聴になれます

連載

直島便り ⑯
いただきます、ごちそうさまは、だれに言うの？

南無庵　庵主　山根 光惠
山口県長門市出身
浄土真宗本願寺派 布教使

令和も、あっという間に四年目となった。

コロナという未知の出来事の経験で明け暮れている令和である。早くコロナが収束しないかと、そればかりを念じている日々が続く。

世界中の人たちが自由に飛び回り、行き来していたあの日常は、いつになったら戻るのであろうか？

さて、今回は私の故郷で行われている「子ども食堂」のことを紹介したいと思う。

私の故郷は、山口県長門市というところだ。「市」といっても小さい街なので、昔は知らない人も多く、長門市のことを説明する時はいつも、「維新の町、萩（市）の隣です」と言っていた。さすがに明治維新のことなら知らない人はいないからだ。

しかし、いつの頃からか、童謡詩人の金子みすゞさんの詩が有名になったことで、長門市は「みすゞさんの出身地です」と説明すると分かってもらえることが多くなった。「ああ、金子みすゞさん、知っていますよ」と言ってもらえるので、とても誇らしい。

また、東山魁夷画伯が、皇居の新宮殿ができる時、ホールに飾る絵として制作した『朝やけの潮』は、長門市の青海島という地の風景がモチーフとなっている。この海と岩の風景は、ぜひ、皆さんに見ていただきたい。

金子みすゞさんや青海島の風景とともに、もうひとつ、長門の自慢がある。それは、人々の「こころのやさしさ」である。

子供食堂会場

長門では昔から、近所の年寄りのことを「じいさま」「ばあさま」、奥さんは「ねえさま」ご主人は「にいさま」と、それぞれの名字の下にこれらの敬称をつけて呼ぶ。「〇〇ちゃん」と呼ぶのは、友達関係の場合である。この誰に対しても「さま」付けする習慣には、何ともいえぬ、やさしさや親しみやすさ、相手を敬う気持ちが溢れている。

そして、先祖をとても大事にする土地柄のため、法事は非常に大切な家の行事となっている。浄土真宗の信仰の盛んな土地で、お寺も多い。そんな長門のお寺の子として、私は生まれた。

私たちの小さい頃は、お寺で日曜学校というものがあって、ほとんどの子どもは、そこで仏様にまつわるお話を聞いて、お供えのおさがりのお菓子をいただいたものだ。その時聞いた仏様のお話は、大人になっても記憶に残っている。

高度経済成長の波とともに、個人の生活が中心となった結果、日曜学校も自然になくなり、子ども時代にお寺にお参りするようなことはほとんどなくなった。そして今、皆が豊かになったかというと、どうなのか。今では逆に格差が生まれ、貧困に苦しむ人も多くなってきているように感じる。

そんな時代において、「皆でいろんなものを分け合おう」という精神から、お寺などで「子ども食堂」を行う運動が盛り上がっている。私の実家のお寺でも、住職とその仲間たちによって「長門ルンルン食堂」と名付けられた子ども食堂が、四年前から始まった。この食堂は、貧困家庭の子どもに限らずどの家の子も利用できる。さらに独り暮らしのお年寄りたちもお手伝いがてら来てくださり、皆で一緒に楽しく食事をいただく。土地柄からか、たくさんの協力者や寄付がある。寄付は食材のほかに、燃料の提供や、時には近くの美容院の方が来て、子どもたちのカットのサービスなどもしていただいていると聞く。これこそ、本来の「布施」の心であろう。また、高校生ボランティアも多数参加していて、これが機会となり管理栄養士を目指している高校生もいるらしい。

「多くのいのちと、皆様のおかげにより、このごちそうをめぐまれました。深くご恩を喜び、ありがたくいただきます」

「尊いお恵みを美味しくいただき、ますますご恩報謝につとめます。おかげでごちそうさまでした」

これが、その子ども食堂で、阿弥陀様の前で皆揃って唱える食前と食後の言葉だ。私たちはひとりではない。仏様からいただいたご縁で結ばれて、私たちは皆一緒に強く生きていきます、と誓う言葉である。

いただきます、ごちそうさま――普段何気なく唱える言葉の意味を、子どもからお年寄りまで一緒に考えてみる。そんな瞬間があることも、子ども食堂の価値なのかもしれない。

POEM

『命を知った日』

朝起きたら
　お母さんが泣いていた
なぜだろうと思った
　お母さんに聴いたら
　　お父さんが死んでいた

星野　駿

僕の祖母は、僕が小さかったから、父の死は憶えていないと思っていたらしい。

僕は「ぜーんぶ覚えているよ」といった。

抱かれたことも、一緒に寝たことも、酔っ払って抱いていた僕を落としそうになったことも、顔も姿も父のことは全部僕の記憶の中に入っている。

15年前、当時、僕は母と共に祖母の家に泊りに、父は仕事に行っていた。

その日の夜、仕事で疲れていたのか、仕事が終わるとサウナに行った。

ウトウトしていたのだろうか、そのまま寝てしまった。他の人が気付いたとき、父はそのまま死んでいた。

翌朝、父の死は祖母の家にいた僕たちに届いた。僕は母の泣き声で目覚めた。

なぜ母が泣いているのか、母から父の訃報を聞かされても、小学校一年生の僕にはよく理解できなかった。

葬式に出て、やっと父の死がわかった。

父に声をかけても反応はなく、ほっぺを触ると、今までいちばんというほど冷たく寂しかった。この時、僕は命ってものすごく大切で、あっけないと思ってしまった。

父の来ない運動会は五日後だ。手を振っても答える父はもういない。それでも僕は、僕のそばでいつも父を感じられるようにしていこうと思った。父の記憶をどんなことも忘れないでいようと。

illustration

永瀬 嘉平
（元毎日新聞記者、ナチュラリスト）

今回は小生が10歳の頃の東京の風景を描いてみました。

その頃の東京は、今のように暖かくなく、銭湯から自宅に帰るとき、絞った手ぬぐいは凍って棒のようになったものです（右）。

そして日光写真（左）。青写真とも呼ばれ、子どもたちの間で大流行しました。少年雑誌の付録についていたなあ、と今でも思い出します。ちなみに青写真という言葉は、冬の季語なんですね。

人間が人間らしく生きているのは、生まれてから15年ほどでしょうか。その後は人間らしさを年々失っていくように思います。

ACTIVITY REPORT

子ども配食の現場から ③

樋田 敦子

嬉しいメッセージが届いた。小学二年生の男の子からの手紙だ。お母さんが**「これ息子が書いたので、読んでください」**と置いていったのである。

「ららばい様」で始まる文章は、字がきれい。そしてとんぼやクワガタの絵も緻密に描かれており、本当に二年生?と思うような筆致で、鉛筆をもらって嬉しかったことが書かれていた。

2枚目の裏紙には、歌詞がびっしりと並んでいる。お母さんが好きなエレカシ(エレファント・カシマシ)の曲の歌詞で、ここの母子はきちんとコミュニケーションが取れていると感じられた。

以前、ここでも書いたが、私たちの配食は単に食料を届ければいいと思ってやっているのではない。もちろん食事に事欠く事態に追い込まれている家庭には、それが最適ではあるだろうが、食べる事だけではなく、お母さんと一緒に作って食べて、思いを共有する。そこがひとつの狙いでもあるのだ。日ごろ忙しいのはわかっていても、少し時間を作って、料理を作りながら会話したり、おいしいねと感動したりする中で何かが生まれる。食料だけではなく、楽しみにつながる何かが手渡せればよいと常々思っていた。

そう考えていたら、子ども向けの絵本や鉛筆の寄付が届いた。配ったところ大好評なのである。

「え、本当にこれもらって行っていいんですか」とお母さんが、子どものために笑顔で鉛筆やシャープペンシルを選ぶ。

「このお話の絵本は持っているので、こちらの本をもらいますね」

そう話して選んでいるお母さんは、子どもの年齢に合わせた本を3、4冊と持って行った。

またある日、釼持理事が、お母さん向けに書籍を持ってきてくれた。渋沢栄一の孫娘の書いた本は、「元気がでる」と好評だった。

今回の小学二年生の子のように、**「字を書くのが好きなので、助かりますーー」**などと書いてくれると、「やった!」と私たちは大喜びしてしまう。本を読んだり、文字や絵をかいたりするのは、人間の本能ともいうべき〝力〟だ。読んだり書いたりすることで、自分の気持ちを相手に伝える基礎力のようなものがつく。コミュニケーション能力が低い子が増えていると言われる昨今。こんなところから、力はついていくのである。

絵本を読んでとお母さんに何度もせがむ5歳の子は**「あつこさんへ　ありがとう」**と手紙を書いてくれた。あつこさんの「あ」の字が鏡字だが一生懸命クレヨンで書いてくれたことを思うと、頬が緩む。

それでも中には**「うちの子は本を読まないので」「字を書いたりしないので鉛筆もいりません」**とはっきりいうお母さんもいる。断定しないで、子どもが通るところに本や筆記具を置いておくとか、働きかけをしてもいいのではないだろうか。

あるお父さんが、コロナ禍の中、失職したが、年齢の関係で希望する職業に就くことはかなわなかったという。

「失業保険だけでは苦しく、こういう食料をくださるところがあるのはわかっていましたが、なかなか勇気が出なくて……。でも来てよかったです。また来ます」

そう言って帰っていった。困ったときはお互い様。おせっかいおばさんのところに来て、話をして、食料を持って帰るだけのことと割り切って来てほしい。

最初はハードルが高くても徐々に慣れてくれば気も軽くなるもの。延べ約400人のひとり親との会話は、回を経るにしたがって濃いものになった。それもそのはず、2月で配食がスタートして1年になる。

小学二年生の男の子からの手紙

活動報告

■イイノホールで行われた「子守唄へのつどい」がYouTubeで配信されています。

これまで20年歌い継いできたららばい協会の歌手たちによる子守唄に加え、タレントの山田邦子さん率いるスター混声合唱団の子守唄あります。

■スミセイキッズフォーラム ファミリーコンサート「ビバ!!ももたろう」インターネット配信

12月17日よりYouTubeで配信中。「浦島太郎」「お花が笑った」「犬のおまわりさん」など子どもと一緒にうたえる14曲が聴けるよ。アクセスしてくださいね。

こちらから→
簡単にアクセス
していただけます。

■子守唄合唱団員大募集

懐かしい子守唄やわらべ歌を童心に返って一緒にうたいませんか。

練習日時　月2回、19時～21時、(日程は別途)
会　　場　中野坂上スタジオコンチェルト
会　　費　5000円／月、学生2000円
入 会 金　3000円、楽譜代、演奏会費は別途。
団　　長・山田邦子、合唱指導・指揮・辻博之、ピアノ・吉本悟子
お問い合わせは　info@lullaby-japan.com

■ご寄付のご案内

【寄付振込先】
○みずほ銀行　浅草橋支店
(普)1090012
トクヒ)日本ららばい協会
○郵便振替口座
00150-3-575309
○ホームページの寄付フォームからも寄付できます。

活動予定

■スミセイキッズフォーラム ファミリーコンサート「うたでつづる　日本の四季」

リアルに皆さんの前で上演してきたファミリーコンサートですが、まだ新型コロナ感染の危険性があるので、インターネット配信されます。春、夏、秋。冬。日本の心をつくるのに、「うた」は欠かせません。家族が一緒に仲良くうたえる「うた」を厳選してお届けします。

2月25日から配信予定です。

■本の紹介　酒井董美さんの「鳥取の民話」

子守唄と縁の深い、民話。鳥取大学や鳥取短期大学の教授を歴任された山陰の口承文芸収録・研究家の酒井董美(ただよし)さんの、日本海新聞での連載「鳥取の民話」が一冊の本になりました。長年かけて集めた90編の民話が収録されています。この民話には各々、QRコードがついていて、スマホなどでもお話しが聴けます。

応援してくださる方々ありがとうございます

協会の活動にご協力くださいました皆様、ご寄付を有効に使わせて頂きます。これからも日本ららばい協会への応援をよろしくお願い申し上げます。温かなご支援を本当にありがとうございます。

2021年年4月1から2021年12月22日現在　五十音順

（敬称略）

【個人】

相川　厚
青戸雅之
青山成夫
青山　司
赤枝恒雄
赤坂みどり
秋田　漣
浅井典子
浅香俊二
朝倉千恵子
浅利香津代
阿部輝彦
雨貝安代
綾乃緒ひびき
新井　満
安藤公二朗
今小路覚真
家中好子
池田正美
池本幸一
井坂義雄
石川昭子
泉　幹子
磯崎節子
市塚廣
井出存祐
いではく
伊藤　守
井上小太郎
井上麻矢
今井要一
今村　威
今元直寛
内野綾子
内野経一郎
浦井正明
江藤昭子
海老沢勝二
戎谷和修
海老名香葉子
江村　清
大泉　勉
大川幸枝
大嶋孝造
大谷智子
大西　菊枝
大野隆司
大野利可
大平量正
小笠原茂
岡田サユリ
岡田正義
岡村　健
岡本喜久穂・あき子
奥山糸子
長田暁二
小野静雄
小野寺純治
尾原昭夫
帯津良一
小山芳郎
温勢孝子
加賀山昭
春日宏美
片山雅文
門山榮作
神長倉万美子
金田康男
川下則子
川島俊六
河原みさ子
川俣泰男
川村隆枝
菊池弥生
木崎啓子
北　実
喜田川妙子
北澤艶子
北村三郎
北本かほる
木下由美子
木邊円慈
木村賢史
木村泰雄
久世明子
国見修二
黒田　巌
下條泰生
剱持英子
小泉晶一
今野七重
近藤征治
小山啓子
甲野郁代
斉藤淑子
紺野泰子
酒井董美
佐浦弘一
坂口佳志江
坂野紀多子
坂野美恵子
坂元威佐
佐々木愛美
佐藤久子
佐藤久光
佐藤美恵
鮫島純子
沢田茂子
澤田　敬
七字泰美
清水睦夫
下地恵子
白石源次郎
白石　幸代
神秀　俊
菅谷志津子
菅原芳徳
杉浦　あい
杉野善彦
須崎晃一
袖山榮眞
関　幸博
素野　悟
田井二郎
高橋佳奈枝
高橋　寛
高松榮子
武井真美子
田尻由貴子
田中厚子
田中牡一郎
田中悦子
田中安子
棚澤青路
谷利亮
谷上昌賢
谷藤正人
田畑博野
千葉　伝
辻　容子
徳永雅博
土木正美
泊　和男
奈加靖子
中澤浪子
中島冨志子
永田　亨
長縄千鶴子
中根宏昭
永見徳代
中村公信
中村金太
中村邦子
中元修治
中山公子
西尾まき
西前幸子
新田なおみ
ノジリ　スミコ
則武清司・美佐子
橋爪八重子
ハシモトマサル・ユミコ
畠順一郎
原　昭邦
原田直之
治田るり子
彌　信道
平井正二郎・一代
平沼美春
平野俊興
廣川俊之
廣畑心香
福井昌平
福島昭子
福田　孜
福永教正
藤石哲朗
藤澤　昇
藤島寛昌
藤田時江
藤村志保
藤本浄彦
藤本純雄
藤森久美子
藤原毅彦
古川洋文
坊田謙治
本條秀太郎
本間渉夏
前田千恵子
真貝まり子
増田善弘
松代洋子
松永忠夫
松原健之
真鍋昌弘
丸山恒子
三浦敏昭
三浦真澄
三浦美智代
三上章道
宮地勝美
宮川久子
宮脇淳子
武藤元昭
村井繁雄
盛田好一
森永紗希子
門奈邦治
安江和也
安岡冨士子
きみさん
安元稔
谷藤純子
山折哲雄
山川　忠
山川敏明
山崎安奈
山崎秀甲
山下隆行
山田宗一
山根光恵
山本ヤエ子
谷村啓子
結城天鼓
湯川れい子
由雄　綾
吉田紀世子
吉田法子
吉田　博
吉田由美子
吉原陽子
米野宗禎
李順子
渡辺久子
渡邊政子

【団体】

一善水産株式会社
銀杏岡八幡神社
絵本のカフェ　おばあさんの知恵袋
学校法人森学園
全国わらべうたの会
有限会社日本トータルライフ
坊田かずまの会
株式会社ミールケア
よし田

【配食・寄付者】

- セカンドハーベスト・ジャパン
- ゼンショーホールディング
- ジャパンハート、サラヤ
- TBSホールディングス
- 三菱鉛筆東京販売、本多浩
- 繁岡慎
- 遠藤尚志
- JA東京スマイル葛飾営農研究会
- 谷藤純子
- NPO法人エスピーシーネットワーク　中央支部　田邊章次
- 安藤公二朗
- 葛飾浴場組合
- 一般社団法人日本米穀商連合会

ご寄付の応援をお願いします！

日本ららばい協会の活動は、皆様からのご寄付に支えられております。すべての子ども達が希望に満ちた未来をつかめるよう、皆様のお気持ちの託された寄付金を、様々な活動にいかしてまいります。

ご寄付をいただきました皆様に小冊子「ららばい通信」、イベントのご案内、また活動報告をお送りさせていただきます。どうぞ時期や金額に関わらず、年間を通してご寄付をお願い申し上げます。ご寄付への詳細は、日本ららばい協会事務局までお問い合わせください。

【寄付振込先】
◯みずほ銀行　浅草橋支店
（普）1090012　トクヒ）日本ららばい協会
◯郵便振替口座　00150-3-575309
◯ホームページの寄付フォームからも寄付できます。

皆様からのお便り・ご投稿をお待ちしております。

◯子守唄について疑問に思うこと・知りたいこと、子育てについて思うこと、親子の思い出話などお送りください。思い出の写真なども募集しております。

◯あなたの町の地域活性化のための活動や育児支援活動、町ならではの活動など紹介したい情報がございましたら、ぜひぜひお教えください。「ららばい通信」を通じて地域の情報交換をしませんか？

◯皆様と共にららばい通信をより良いものにしていきたいと考えております。お気軽にご意見・ご感想をお寄せください。

日本ららばい協会事務局　編集人・樋田敦子
〒125-0054
東京都葛飾区高砂3-13-13 三浦ビル1階
TEL　03-6458-0283
FAX　03-6458-0284
Eメール　info@lullaby-japan.com
URL　https://lullaby-japan.com

ららばい通信ご入用の方は当協会にご連絡下さい。
また、保存希望の施設や団体の方も合わせてお申込みくださいませ。

［発行人］西舘好子
［編集人］樋田敦子
［発行所］NPO法人 日本ららばい協会　〒125-0054 東京都葛飾区高砂3-13-13 三浦ビル1階
TEL 03-6458-0283　FAX 03-6458-0284　E-mail info@lullaby-japan.com　URL https://lullaby-japan.com